

各関係機関長 様

熊本県病虫害防除所長

病虫害発生予察情報について（送付）

令和7年度（2025年度）発生予報第3号を下記のとおり発表しましたので送付します。

令和7年度（2025年度）病虫害発生予報第3号（6月予報）

I 気象予報：令和7年（2025年）5月22日福岡管区气象台発表

◎向こう1ヶ月の気象予報（単位：％）

予報対象地域	要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
九州北部全域 (含、山口県)	気温	20	40	40
	降水量	20	40	40
	日照時間	40	40	20

II 【今後、注意すべき病虫害】

1 発生の概要

作物	病虫害名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
早期・ 早植え水稻	葉いもち	並	並	並(±)	並(±)	降水多～並 (+)	
	イネミズ ゾウムシ	並	並	並(±)	並(±)	気温高～並 (+)	
イグサ	イグサ シンムシガ	並	並	—	やや多～並 (+)	気温高～並 (+)	予察灯調査 八代市 並(±)
茶	炭疽病	やや少	やや少	少(-)	並～やや少 (±)	気温高～並 (+) 降水多～並 (+)	
	カンザワ ハダニ	並	並	並(±)	並～やや少 (±)	気温高～並 (+) 降水多～並 (-)	ほ場調査 茶業研究所 並(±)
	チャノコカク モンハマキ	やや少	並	やや少(-)	並(±)	気温高～並 (+) 降水多～並 (-)	フェロモントラップ 合志市 並 御船町 並 (±)
	チャノミドリ ヒメヨコバイ	並	少	やや少(-)	並(±)	気温高～並 (+) 降水多～並 (-)	ほ場調査 茶業研究所 並(±)

作物	病害虫名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
茶	クワシロカイ ガラムシ	やや少	やや少	少(-)	並(±)	気温高～並(+) 降水多～並(-)	
カンキツ	黒点病	やや多	並	—	並～やや少(±)	降水多～並(+)	果樹研究所 多(+)
	そうか病	やや多	並	やや多(+)	並(±)	気温高～並(-) 降水多～並(+)	果樹研究所 多(+)
	かいよう病	並	やや少	並(±)	並(±)	降水多～並(+)	果樹研究所 並(±)
	ミカンハダニ	やや少	少	少(-)	並～やや少(±)	気温高～並(+) 降水多～並(-)	果樹研究所 やや少(-)
	チャノキイロ アザミウマ	並	並	—	並～やや少(±)	気温高～並(+) 降水多～並(-)	トラップ調査 熊本市 並(±)
ナシ	黒星病	やや少	やや多	やや少(-)	並～やや少(±)	気温高～並(-) 降水多～並(+)	
果樹全般	カメムシ類	少	少	—	並～少(-)	気温高～並(+)	予察灯調査 宇城市 少 天草市 少(-)
イチゴ 育苗ほ	炭疽病	並	並	並(±)	並(±)	気温高～並(+)	
	うどんこ病	並	並	並(±)	並(±)	気温高～並(-) 降水多～並(+)	
	ハダニ類	並	やや少	やや少(-)	並(±)	気温高～並(+)	



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

作物	病害虫名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
ウリ科野菜	退緑黄化病 (スイカ 退緑えそ病)	やや多	多	キュウリ 退緑黄化病 並(±) コナジラミ 多(+)	退緑黄化病 キュウリ 並 スイカ やや多~並 (±) コナジラミ キュウリ 並 スイカ やや多~並 (±)	(コナジラミ) 気温高~並 (+)	
冬春果菜類	タバコ コナジラミ	やや多	多	キュウリ 多(+)	スイカ やや多~並 ナス, キュウ リ 並(±)	気温高~並 (+)	
	アザミウマ類 (イチゴ除く)	並	並	キュウリ 少(-)	スイカ やや多~並 ナス, キュウ リ 並(±)	気温高~並 (+)	
野菜全般	オオタバコガ	並	並	—	ナス, キャベ ツ 並(±)	気温高~並 (+) 降水多~並 (-)	フェロントラップ° 合志市 少 山都町 や や少 阿蘇市 多 八代市 並 (±)

※予想の根拠末尾の括弧書きは、(+)は発生を助長する要因、(-)は発生を抑制する要因、(±)は影響が少ない要因であることを示す。



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

2 予想発生量、根拠、対策等

◎早期・早植え水稻

1) 葉いもち

(1) 発生量：並

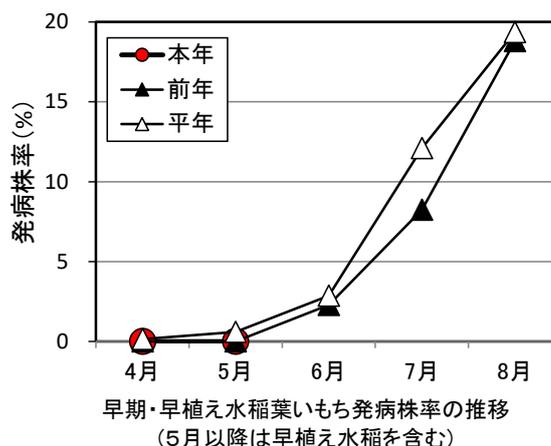
(2) 根拠

ア 5月の巡回調査では、発病株は確認されず（発病株率平年0.6%）、平年並の発生であった（±）。

(3) 対策

ア いもち病感染好適条件（BLASTAM）の判定結果を参考に、ほ場での発生状況を観察し、発生初期に防除を行う。最新の情報は熊本県病害虫防除所のホームページ（<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>）を参照する。

イ 箱施薬を行っていないほ場では、特に早期発見に努め、初期防除を徹底する。



2) イネミズゾウムシ

(1) 発生量：並

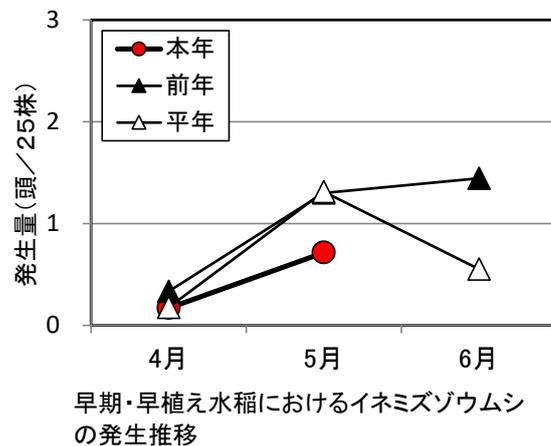
(2) 根拠

ア 5月の巡回調査では、被害度5.6（平年9.7）、寄生頭数1.0頭/25株（平年1.3頭/25株）と平年並の発生であった（±）。

(3) 対策

ア 箱施薬の有無で被害程度が異なるので、箱施薬を行っていないほ場で成虫の密度が12.5頭/25株（畦畔から3mのところ）を超える場合は防除を行う。

イ 根の発育が不良な水田では幼虫の被害が大きくなるため、間断かん水を行い、根の健全な生育を図る。



◎イグサ

1) イグサシンムシガ

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 八代地域の5月第1～4半旬の1ヶ所当たりの予察灯誘殺数は0.8頭（平年0.8頭）と平年並であった（±）。

(3) 対策

ア 越冬世代の発蛾最盛日から予測される第1世代の発蛾最盛日は6月2日（5月27日時点）。なお、最新の情報は病害虫防除所のホームページ（<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>）を参照する。

イ ほ場での発生状況に注意しながら、発蛾最盛期およびその後1～2週間の範囲で2回程度の広域防除を行い、第二世代幼虫による被害を防ぐ。

ウ 産卵およびふ化幼虫の食入を防止するため、第二世代幼虫期に5cm以上の深水管理を行う。

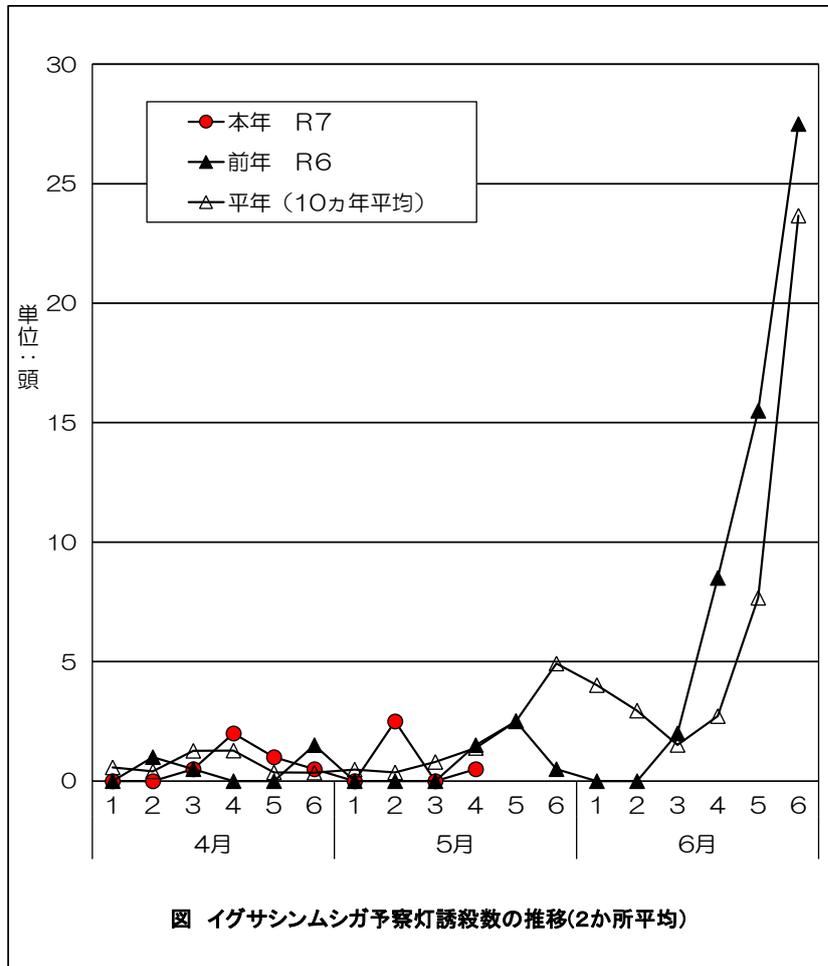


本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

表 有効積算温度による第1世代発蛾最盛期の予測日

地域	越冬世代 発蛾最盛期 (実測)	産卵前期間	基準日 (積算開始日)	第1世代 発蛾最盛期 (予測)
八代	4月12日	4月13～15日	4月16日	6月2日



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

◎茶

1) 炭疽病

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

ア 5月の巡回調査では、発病が認められず（発病葉平均2.7葉/m²）、平年比少の発生であった（-）。

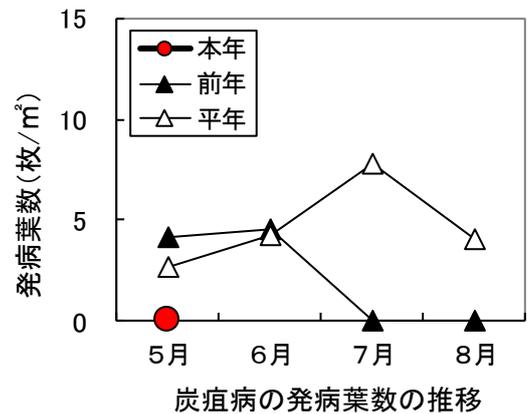
イ 5月22日福岡管区気象台発表の九州北部地方1ヶ月予報では、降水量が平年比多～並の予想である（+）。

(3) 対策

ア 感染は、開葉直後の新葉に限られるため、萌芽～開葉期に薬剤散布する。

イ 二、三番茶を摘採しない園は、深刈り、浅刈り等を行い伝染源となるり病葉の除去に努める。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



炭疽病の発病葉数の推移

2) カンザワハダニ

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 5月の巡回調査では、寄生葉率5.8%（平年7.4%）と平年並の発生であった（±）。

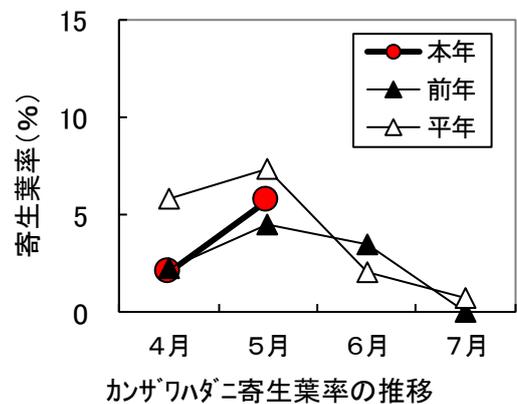
イ 茶業研究所（御船町）の5月第4半旬の調査では、寄生葉率3.0%（平年2.0%）と平年並の発生であった（±）。

(3) 対策

ア 発生密度が高い場合は、収穫前使用日数を考慮のうえ防除を行う。なお、規定の散布量を葉裏まで薬剤が届くよう丁寧に散布する。

イ 摘採直前に発生が多い場合は、摘採時期を早めて被害の軽減に努める。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



カンザワハダニ寄生葉率の推移

3) チャノコカクモンハマキ

(1) 発生量：やや少

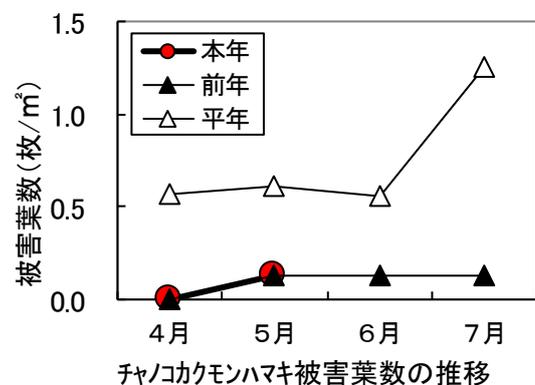
(2) 根拠

ア 5月の巡回調査では、被害葉数0.1葉/m²（平年0.6葉/m²）と平年比やや少の発生であった（-）。

イ フェロモントラップ調査では、5月第1～4半旬の捕獲頭数が、合志市は16頭（平年34頭）、御船町は45頭（平年60頭）と平年並の発生であった（±）。

(3) 対策

ア ほ場を見回り発蛾最盛期から7～10日後の若齢幼虫を対象に防除を行う。



チャノコカクモンハマキ被害葉数の推移



4) チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 発生量：並

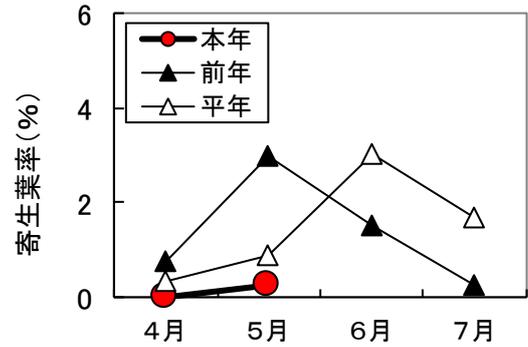
(2) 根拠

ア 5月の巡回調査では、寄生葉率0.3%（平年0.9%）と平年比やや少の発生であった（－）。

イ 茶業研究所（御船町）のたたき落とし調査では、5月第4半旬の捕獲頭数が6頭/10ヶ所（平年4頭/10ヶ所）と平年並の発生であった（±）。

(3) 対策

ア 新芽が加害されるため、萌芽～1葉期に防除する。



チャノミドリヒメヨコバイ寄生率の推移

5) クワシロカイガラムシ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

ア 5月の巡回調査では、寄生が認められず（平年7.9%）、平年比少の発生であった（－）。

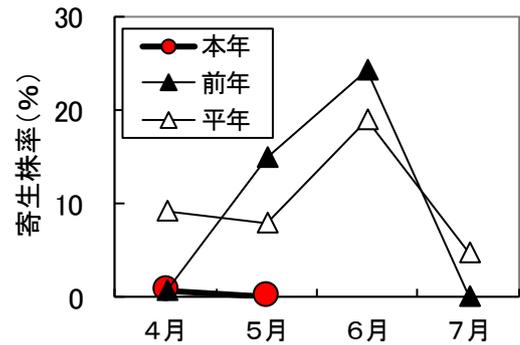
(3) 対策

ア 防除適期は、ふ化最盛期（卵塊全体の60～80%になった時期）であるため、ふ化状況をよく観察して防除する。

イ アメダス地点の有効積算温度シミュレーションによる第二世代ふ化最盛日の予測では前年より7～9日程度遅い予測であった（5月25日現在の気象データから算出）。ほ場をよく観察し、防除時期を判断する。なお、最新の情報は熊本県病害虫防除所のホームページ (<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>) を参照する。

ウ 発生が多い場合は、一番茶後に中切りして、その後防除を徹底する。

エ 幼虫は、苗木や農機具に付着して分散する場合もあるので、苗木購入、育苗、摘採等管理作業で分散しないように十分注意する。



クワシロカイガラムシ寄生率の推移

表 有効積算温度によるふ化最盛日予測

アメダス 地点名	第2世代		
	本年	前年	前年比
鹿北	7月17日	7月9日	8日遅い
菊池	7月9日	7月2日	7日遅い
甲佐	7月10日	7月3日	7日遅い
水俣	7月7日	6月28日	9日遅い
上	7月13日	7月4日	9日遅い



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

◎カンキツ

1) 黒点病

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠

ア 果樹研究所（宇城市）の無防除区において、初発は5月22日（平年5月30日）と、平年より早く、発病果率が30.0%（平年2.1%）と平年より多かった（+）。

イ 5月22日福岡管区気象台発表の九州北部地方1ヶ月予報では、降水量が平年比多～並の予想である（+）。

(3) 対策

ア 保菌率が高い直径5～10mmの枯枝はせん除する。また、せん除後もそれらの枝は伝染源になるので、園外に処分する。

イ 果実被害を防ぐため、主な感染時期である梅雨期直前から防除を始める。

ウ 前回の散布から累積降水量が200mm～250mmを越えた時期、または25日～30日経過した時期を目安に防除する。

2) そうか病

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠

ア 5月の巡回調査では発病葉率は0.8%（平年0.4%）と平年比やや多の発生であった（+）。

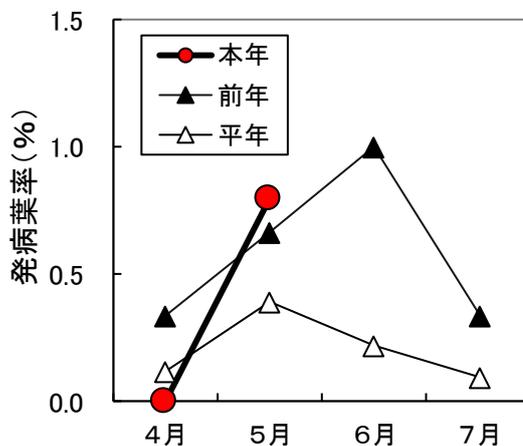
イ 果樹研究所（宇城市）の無防除区では、5月下旬の発病葉率82.8%（平年50.9%）と平年比多の発生であった（+）。

(3) 対策

ア 伝染源の量がその後の発生に大きく影響するので、病葉はできるだけせん除し、併せて園内の通風・採光を図り、雨露が早く乾くようにする。

イ 落花期から梅雨末期までの防除が有効であるため、時期を逃さないようにする。なお、果実での潜伏期間は好適条件下で10～15日である。

ウ 摘果時は、被害果の除去に努める。



そうか病発病葉率の推移



3) かいよう病

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 5月の巡回調査では、発病葉率0.2%（平年0.3%）と平年並の発生であった（±）。

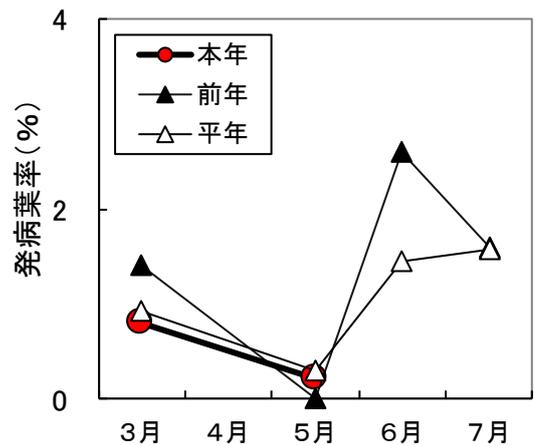
イ 果樹研究所（宇城市）の予察ほ場では、5月下旬の発病葉率は4.6%（平年7.7%）と平年並の発生であった（±）。

(3) 対策

ア 伝染源となる発病葉や枝などのせん除や薬剤防除を徹底し、幼果への感染拡大を防止する。

イ ミカンハモグリガの食害痕は、本病が発病しやすいので防除及びせん除を行う。

ウ 強風による葉や枝の損傷を少なくするため、防風樹がない園では防風網を設置する。



かいよう病発病葉率の推移

4) ミカンハダニ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

ア 5月の巡回調査では、雌成虫の寄生が認められず（平年寄生葉率5.2%、平年寄生頭数2.8頭/10葉）、平年比少の発生であった（-）。

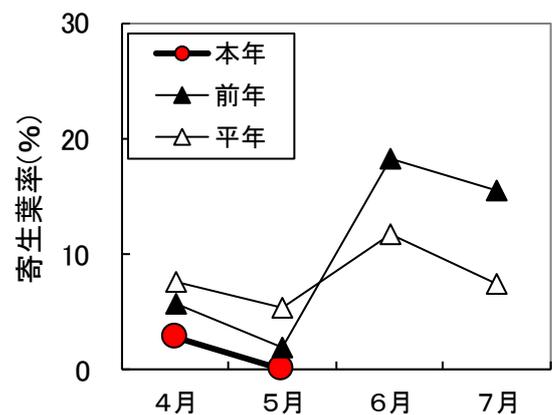
イ 果樹研究所（宇城市）の予察ほ場では、5月第4半旬に雌成虫の寄生葉率1.0%（平年13.3%）、寄生頭数0.1頭/10葉（平年2.1頭/10葉）と平年比やや少の発生であった（-）。

(3) 対策

ア 定期的に園を観察し、雌成虫の寄生葉率が30～40%または、寄生頭数が5～10頭/10葉に達したら防除を行う。

イ 多発ほ場ではマシン油乳剤を散布し、夏ダニの発生を予防する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



ミカンハダニの寄生葉率の推移



5) チャノキイロアザミウマ

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠

ア 熊本市河内町の粘着トラップ調査における5月第4半旬のトラップ1枚あたり捕獲数は0.1頭/日（平年0.2頭/日）と平年並の発生であった（±）。

- (3) 対策

ア 第2世代幼虫から果実への加害が始まる。有効積算温度シミュレーションの計算結果で得られた羽化最盛期を参考にほ場を観察、発生量を把握し、防除を実施する。なお、第2世代及び第3世代の羽化最盛期は下表のとおりに予想された。

表 チャノキイロアザミウマ羽化最盛期予測結果（5月26日現在）

地点名	本年		平年（10年平均）		平年比	
	第2世代	第3世代	第2世代	第3世代	第2世代	第3世代
熊本	6月3日	6月25日	5月30日	6月22日	4日遅い	3日遅い
三角	6月8日	6月30日	6月4日	6月27日	4日遅い	3日遅い
本渡	6月9日	7月2日	6月8日	7月1日	1日遅い	1日遅い
八代	6月5日	6月27日	6月1日	6月25日	4日遅い	2日遅い
水俣	6月7日	6月30日	6月3日	6月26日	4日遅い	4日遅い

なお、最新の情報は熊本県病害虫防除所のホームページ (<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>) を参照する。

- イ 発生調査は、果実（100果）を5,000～10,000倍に薄めた展着液または洗剤で洗い、ティッシュペーパーで濾した後、ルーペや実体顕微鏡で虫数を数える。捕獲された虫数が10頭を超えた場合は防除を行う。

◎ナシ

1) 黒星病

- (1) 発生量：やや少
- (2) 根拠

ア 5月の巡回調査では、発病葉率0.3%（平年1.0%）と平年比やや少の発生であった（－）。

- (3) 対策

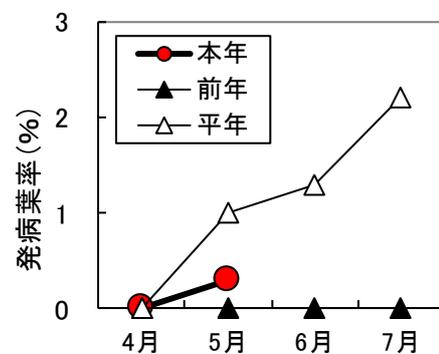
ア り病葉及び果実は、周囲への伝染源となるため、見つけ次第園外に持ち出し処分する。

イ 「幸水」の果実は、開花60～85日後（6月上旬～7月上旬）に黒星病に対する感受性が再度高くなるため注意する。

ウ 保護殺菌剤による予防散布を心掛ける。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。Q o I 剤（FRACコード11）及びS D H I 剤（FRACコード7）の年間使用回数は2回までを基本とする。

オ 降雨が多いと発生が多くなるため、梅雨期の防除を徹底する。



◎果樹全般

1) カメムシ類

(1) 発生量：少

(2) 根拠

ア 4～5月中旬までの予察灯によるチャバネアオカメムシ及びツヤアオカメムシの誘殺数は、各地点とも平年比少であった（一）。

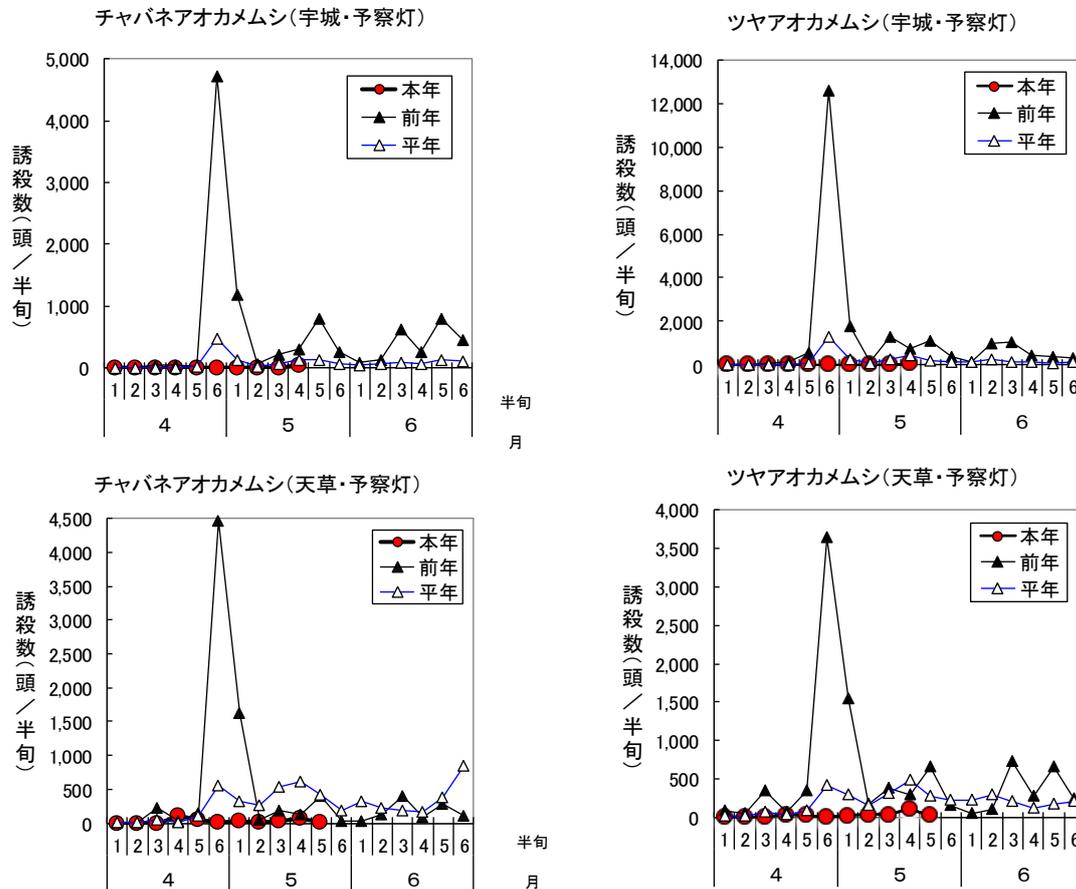


図 果樹カメムシ類の予察灯誘殺数の推移

(3) 対策

ア 果樹カメムシ類は、局地的に飛来し、被害をもたらすことがあるので、定期的に園を見回り、早期発見と薬剤による初期防除を徹底する。特に、山間部や山沿いの園地は被害を受けやすいので注意する。

イ カメムシ類の予察灯及びフェロモントラップの誘殺数データを熊本県病害虫防除所のホームページ (<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>) に掲載しているので、最新の誘殺状況を確認し、防除要否や適期防除の参考にする。

ウ ピレスロイド系殺虫剤は、天敵等への影響が大きく、ハダニ類の発生を助長するので、最小限の使用にとどめる。



本予報は、ホームページに掲載しています。

[「https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html」](https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html)

◎イチゴ育苗ほ

1) 炭疽病

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 5月の巡回調査では、発病株は確認されず（平年0.1%）、平年並の発生であった（±）。

(3) 対策

ア 親株床、育苗床はビニールで雨よけをする（3 防除のポイント等の「イチゴ育苗ほでの病害虫の発生を防止しましょう」を参照）。

イ 頭上かん水は避け、株元に手かん水する。

ウ 育苗ポットの間隔を広げ、不要な下葉を除去し通風採光を良くする。

エ 発病株は早期にほ場外に持ち出し、ビニール袋に入れるか、土中深くに埋没処分する。

オ 発病後の薬剤散布は効果が低いため、予防散布に努める。特に、降雨後および摘葉、ランナー切除後は感染しやすいので必ず防除する。薬剤散布は株元まで十分かかるように行う。

2) うどんこ病

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 5月の巡回調査では、親株の発病株率0.3%（平年1.5%）と平年並の発生であった（±）。

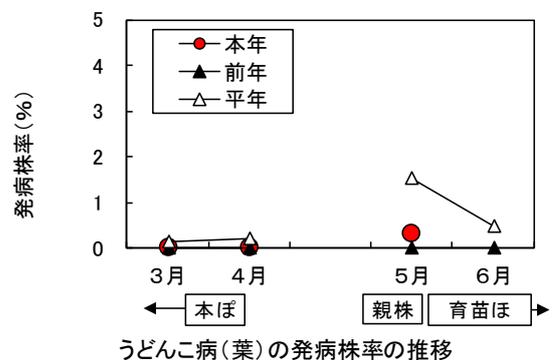
(3) 対策

ア 発生していないほ場でも定期的に防除を行い、発生前から予防防除を徹底する（3 防除のポイント等の「イチゴ育苗ほでの病害虫の発生を防止しましょう」を参照）。

イ 発病葉は早期に取り除き、ほ場外で処分する。

ウ 葉の展開に合わせて適正に葉かぎを行い、薬剤は葉裏に十分かかるように散布する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



うどんこ病(葉)の発病株率の推移

3) ハダニ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 5月の巡回調査では、親株の寄生葉率8.0%（平年19.5%）と平年比やや少の発生であった（-）。

(3) 対策

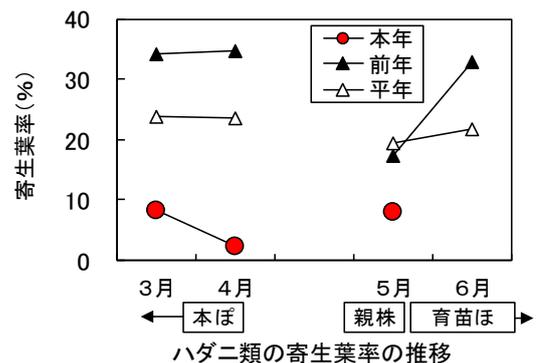
ア 寄生葉を早期に取り除き、ほ場外で処分する。

イ 寄生密度が高くなると防除が困難となるため、発生初期の防除を徹底する。

ウ 薬剤は下位葉の葉裏にも十分かかるように散布する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、育苗から本ぼまでの栽培期間を通した防除計画を立て、気門封鎖剤等も利用しながら、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

オ その他詳細は、3 防除のポイント等の「イチゴ育苗ほでの病害虫の発生を防止しましょう」を参照する。



ハダニ類の寄生葉率の推移



◎ウリ科野菜

1) 退緑黄化病、退緑えそ病

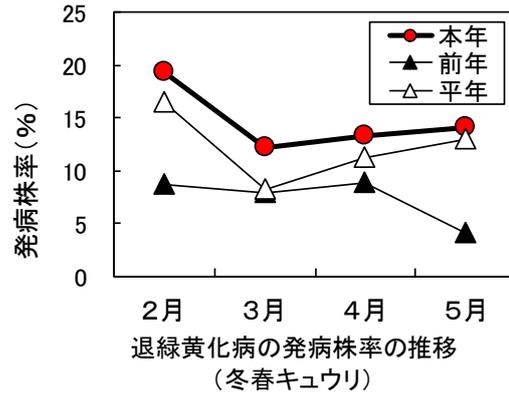
(1) 発生量：やや多

(2) 根拠

ア 5月のキュウリの巡回調査では、退緑黄化病の発病株率14.0%（平年13.0%）と平年並、タバココナジラミは一部のほ場で多発し、寄生葉率17.0%（平年6.7%）と平年比多の発生であった（+）。

(3) 対策

ア 保毒虫を施設内で「増やさない」対策および「出さない」対策を徹底する（3 防除のポイント等の「施設野菜での次期作付のための病害虫対策を実施しましょう」を参照）。



◎冬春果菜類

1) タバココナジラミ

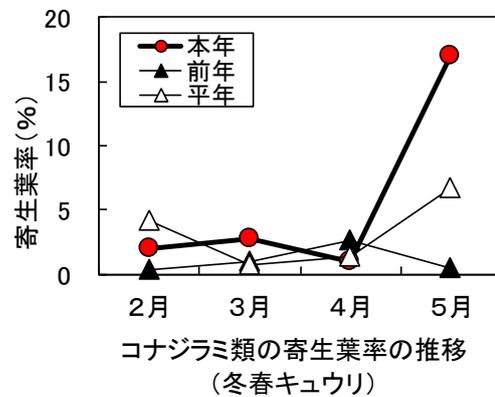
(1) 発生量：やや多

(2) 根拠

ア 5月のキュウリの巡回調査では、一部のほ場で多発し、寄生葉率17.0%（平年6.7%）と平年比多の発生であった（+）。

(3) 対策

ア タバココナジラミは、トマト黄化葉巻病、トマト黄化病、ウリ類退緑黄化病、スイカ退緑えそ病の病原ウイルスを媒介するので、トマト、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する（3 防除のポイント等の「施設野菜での次期作付のための病害虫対策を実施しましょう」を参照）。



イ ウイルス病発病株は二次伝染源となるので、見つけしだい直ちに抜き取り施設外に持ち出し埋没処分する。

ウ 施設周辺及び内部の雑草は、生息・増殖場所となるので除去する。

エ 黄色粘着トラップ等を施設内に設置し、早期発見に努める。

オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



2) アザミウマ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 5月のキュウリの巡回調査では、発生は確認されず(平年3.9%)、平年比少の発生であった(ー)。

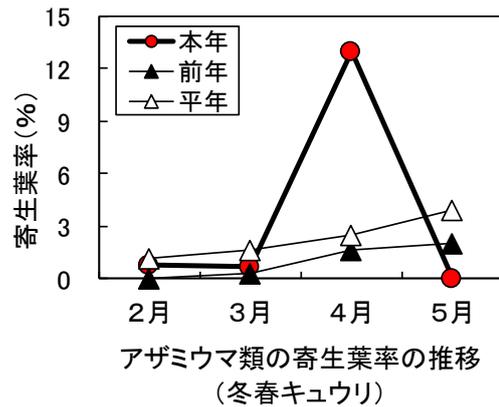
(3) 対策

ア ミナミキイロアザミウマはウリ類黄化えそ病の病原ウイルスを媒介するので、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する(3 防除のポイント等の「施設野菜での次期作付のための病害虫対策を実施しましょう」を参照)。

イ 施設周辺及び内部の雑草は、生息・増殖場所となるので除去する。

ウ 粘着トラップ等を設置し、早期発見に努め、発生初期からの防除を徹底する。粘着トラップの色は、ミナミキイロアザミウマに対しては青色、ミカンキイロアザミウマに対しては青色または黄色を使用する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



アザミウマ類の寄生率の推移
(冬春キュウリ)

◎野菜全般

1) オオタバコガ

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア フェロモントラップによる5月第1～4半旬の誘殺数は、阿蘇市で平年比多、八代市で平年並、山都町で平年比やや少、合志市で平年比少であった(±)。

表 各地域のオオタバコガの誘殺状況(5月第1～4半旬)

市町村名(地域名)	本年(頭)	平年値(頭)	平年比(%)
合志市(栄)	0.0	12.1	0
八代市(鏡)	9.4	11.1	85
阿蘇市(一の宮)	4.9	1.3	386
山都町(鶴ヶ田)	9.1	16.5	55

(3) 対策

ア 施設栽培では、成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。

イ 1卵ずつ産卵するため、卵での発見は困難である。幼虫は、花や果実、頂芽を好んで加害するため、よく観察し被害が拡大する前に防除する。果菜類では果実内部に、結球する葉菜類では結球内部に食入し、薬剤がかかりにくくなるため、食入前の早期防除を徹底する。

ウ 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を行う。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



3 防除のポイント等

ウンカ類の飛来情報の収集に努めましょう

「坪枯れ」等の被害を引き起こすトビイロウンカの飛来について、本年は平年より早い時期から確認されています（詳細は、令和7年5月16日付け技術情報第3号（<https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/279954.pdf>）を参照）。今後、梅雨時期を中心に海外から断続的に飛来すると予想されますので、飛来情報やほ場内の密度を定期的に把握し、適期防除を行いましょ。

- (1) ウンカ類の飛来情報を病害虫防除所ホームページ（<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>）で確認し、適期防除に努める。
- (2) トビイロウンカに対して効果の高い箱施薬剤を使用しているほ場でも、飛来や発生が多い年は防除のタイミングを逃さないように注意する。

スクミリンゴガイの防除対策について

昨年は平坦地を中心に多発ほ場が散見されました。水温が15℃を超えると活動を開始しますので、移植後はほ場をよく観察して、以下の防除対策を徹底しましょう。

- (1) 水路から水田への侵入を防ぐため、取水口および排水口は金網（4mm以下）で覆う。さらに、排水口は、常に排水路の水面より高くなる場所に配置する。
- (2) 深水管理すると被害が大きくなるので、発生が多い水田では水深1cm以下の浅水管理を行う。
- (3) 移植後に水田内の貝が多いときは捕獲する。特に、浸冠水後は貝が侵入しているので、見回り捕獲する。
- (4) 薬剤防除を行う際、薬剤には貝が摂食して殺貝効果が現れる剤（メタアルデヒド等）と食害防止する剤（カルタップ等）があり、食害防止効果を持つ剤の使用後に、食毒による効果のある剤を使用すると効果が発揮できないので併用はしない。
- (5) 特殊肥料として販売されている椿油粕は、農薬として登録されていないため、スクミリンゴガイなど農作物の害虫の駆除目的で使用しない。

麦類のかび毒対策を徹底しましょう

本年は麦類の赤かび病が平年より広い範囲で発生しています（詳細は、令和7年5月12日付け技術情報第2号（<https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/279551.pdf>）を参照）。収穫前で赤かび病が多発しているほ場がある場合は、下記の対策を徹底しましょう。

- (1) 収穫時にほ場を確認し、赤かび病発生の多いほ場や発生ほ場で倒伏がみられた場合は、かび毒汚染の可能性が高くなるため、可能な限り、他の麦とは分けて収穫する。
- (2) 共同乾燥施設においては、荷受時に赤かび病被害粒のチェックを行い、赤かび病被害粒がみられた場合は、必要に応じてその他の麦とは別に乾燥するなどの仕分けを行う。
- (3) 赤かび病被害粒は粒厚が薄く、また比重が軽い傾向があるため、粒厚選別や比重選別により被害粒除去に努める。



イチゴ育苗ほでの病害虫の発生を防止しましょう

1 ハダニ類

ほ場をよく観察するとともに、以下の防除対策を徹底し、育苗ほでの発生を防止しましょう。

<防除対策>

- (1) ほ場周辺およびほ場内の雑草は定期的に除草する。
- (2) 除去した下葉や株は、ほ場周辺に放置せず適切に処分する。
- (3) 育苗ほでハダニ類の発生が認められた場合は、薬剤抵抗性の発達を防ぐため、気門封鎖剤を積極的に活用する。ただし、気門封鎖剤は、卵に効果が低く、残効も短いため、約7日間隔で複数回散布する。

2 炭疽病

保菌親株から苗への炭疽病菌の伝染及び苗での炭疽病菌のまん延を防止するため、以下の防除対策を徹底しましょう。

<防除対策>

- (1) 親株ほ、育苗ほは必ず雨よけを行う（寒冷紗は雨よけにならない）。
- (2) 親株ほ、育苗ほにはこれまで本病が発生していないほ場を選び、冠水しないように排水対策を講じる。
- (3) 頭上かん水は避け、株元に手かん水にする。
- (4) ランナー発生前から予防的に薬剤防除を行う。特に、降雨後や摘葉、ランナー切除後は感染しやすいので必ず防除する。
- (5) 発病株は早期にほ場外に持ち出し、ビニール袋に入れるか、土中深くに埋没処分する。

3 うどんこ病

梅雨時期は発病に好適となり、この時期に発生が多くなると秋期の発生が多くなります。本ほ定植後の発生を抑制するため、以下の防除対策を徹底しましょう。

<防除対策>

- (1) 発病葉および不要な下葉は早期に取り除き処分する。
- (2) 早期発見のため、発生しやすい葉裏まで丁寧に観察する。
- (3) 薬剤防除は葉裏に十分かかるように散布する。
- (4) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。
- (5) 気温が高い夏期は病勢が抑制されるが、定期的に予防防除を行い、新葉への感染を防ぐ。



施設野菜での次期作付のための病害虫対策を実施しましょう

1 野菜のウイルス病まん延防止について

本県では「トマト黄化葉巻病」、「トマト黄化病」、「キュウリ・メロン黄化えそ病」、「キュウリ・メロン退緑黄化病」、「スイカ退緑えそ病」などのウイルス病が発生しています。これら病原ウイルスは、コナジラミやアザミウマ等の微小害虫により媒介されます。

そこで、ウイルスを保毒した微小害虫のまん延を防止するため、栽培終了後に密閉処理を行い、まずは植物体を完全に枯らしましょう。さらに、10日以上処理を継続することで、確実に微小害虫を施設内で死滅させましょう。

◎密閉処理による微小害虫防除のポイント

- (1) 微小害虫（成虫）は、絶食状態では1日以内に死亡する。そこで、施設内の微小害虫を死滅させるため、施設内の雑草を除去し、作物を枯死させることで、植物を摂食できない状況を作る。
- (2) 施設内の微小害虫が施設外へ飛び出さないよう、施設は被覆ビニル等でしっかりと密閉する。
- (3) 密閉する日数は、害虫の習性や寄生部位等を考慮して決める。
 - ・コナジラミ類の終齢幼虫は、株が完全に枯死しないと生存、羽化する場合がある。
 - ・ミナミキイロアザミウマの蛹は、土の中にいて植物を摂食しないため、株の枯死と関係なく生存する。蛹期間が、20℃で約7日であるため、密閉処理は、植物体が完全に枯れてから10日以上続ける必要がある。
- (4) 悪天候等で作物の枯死に時間がかかると予想される場合には、古株枯死に使用できる薬剤^{注1}の併用も検討する。なお、使用にあたっては、必ずラベルなどで使用方法を確認し、遵守する。
- (5) 密閉処理の途中で施設を開放すると、微小害虫が野外へ逃げ出すため、施設内の片付けは、密閉処理期間を過ぎた後に行う。

注1) 令和7年5月29日現在において使用可能な薬剤は以下のとおり

- ・カーバムナトリウム塩液剤（商品名：キルパー）
- ・クロルピクリンくん蒸剤（商品名：クロピクフロー）

※クロルピクリンくん蒸剤のうち使用できるのはフロー剤のみ

◎野良生えトマトの除去を徹底しましょう

密閉処理を行っても、ハウス周辺に野良生えトマトがあると保毒虫が残る可能性がある。そのため、ハウス周辺の廃棄トマトは早期に土中に埋めるなど適切に処分する。



Ⅲ 【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予想	発生概況及び注意すべき事項等
		平年比	
茶	チャノキイ ロアザミウ マ	並	巡回調査では、平年比やや多（＋）。 粘着トラップ調査では合志市で平年比やや少（－）。 新芽が加害されるため、萌芽～1葉期に防除する。
	チャノホン ガ	少	巡回調査では、平年比少（－）。 フェロモントラップ調査では、合志市、御船町で平年比少（－）。 ほ場を見回り発蛾最盛期から7～10日後の若齢幼虫を対象に防除を行う。
	ツマグロア オカスミカ メ	並	巡回調査では、平年並（±）。 防除員報告では平年比やや多～並（±）。 常発園、多発園では、萌芽期を重点に防除する。
カキ	炭疽病	やや多	防除員報告では、平年並（±）。 降水量は平年比多～並の予想である（＋）。 梅雨期は発生が多く、蔓延しやすい時期であるため、予防防除に努める。
夏秋 キュウリ (高冷地)	べと病	並	防除員報告では、平年並（±）。 適切な肥培管理を行う。
	うどんこ病	並	防除員報告では、平年並（±）。 初期発生を認めたら直ちに薬剤防除を行う。
野菜類全般	ハスモンヨ トウ	並	巡回調査では、イチゴで平年並（±）。 防除員報告では、サトイモ、ナス、イチゴで平年並、アスパラガスで平年並～やや少（±）。 フェロモントラップ調査では、八代市、阿蘇市で平年並、合志市、山都町で平年比やや少（－）。 早期発見、早期防除に努め、施設栽培では防虫ネットで侵入を防ぐ。
	アブラムシ 類	並	巡回調査では、キュウリ、イチゴで平年並（±）。 防除員報告では、スイカで平年比やや多～並、ナス、ピーマン、キュウリ、イチゴ、サトイモ、ハウレンソウ、キャベツ、ダイコンで平年並、アスパラガスで平年並～やや少（±）。 早期発見、早期防除に努め、施設栽培では防虫ネットで侵入を防ぐ。
	コナガ	やや多	防除員報告では、キャベツで平年比やや多～並、ダイコンで平年比やや多（＋）。 フェロモントラップ調査では、阿蘇市で平年比多、山都町で平年比少（±）。 早期発見、早期防除に努める。
<p>【野菜病害虫の共通対策事項】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・換気や排水を良くし、過湿の防止に努める（病害）。 ・多発後は防除が困難になるので、早期発見と初期防除に努める。 ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。 			



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

農薬安全使用上の留意点

農薬を使用する際は、必ずラベルなどで使用方法を確認し、登録がある農薬を使うとともに、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。

また、ミツバチや魚介類など周辺動植物及び環境へ影響がないよう、飛散防止を徹底するとともに、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行うなど、危害防止に努めましょう。

- ◎ 詳しい内容等については 病害虫防除所(農業研究センター生産環境研究所予察指導室)
(TEL : 096-248-6490) にお問い合わせ下さい。
※なお、本文はホームページ「<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>」
上に掲載しています。

